

クラス	TU309	担当教員	塩崎 美穂
テーマ	保育実践の生成と創造—子どもとともに保育実践をつくる		
著書・論文	【著書】近藤幹生・塩崎美穂『保育の哲学2』2016、『保育の哲学3』2017、ななみ書房		
研究課題等	【著書】塩崎美穂編著『子どもとつくる3歳児保育』ひとなる書房、2016		
	【論文】「地域子育て支援拠点における困難や悩みをもつ親の支援に関する考察:支援職の「語り」の分析」星三和子,塩崎美穂,向井美穂,上垣内伸子『保育学研究』52(3), 2014		
ゼミナール概要			
キーワード：あそびとまなび、暮らしにおける希望の創造、公的保育、子どもとつくる保育実践			
<p>【目的】</p> <p><子どもを産み育てる>という営みを「家族だのみ」にしてきた日本型企业社会は、大きな転換期を向かえています。終身雇用慣行や近代家族といういわば暗黙の社会福祉制度が弱体化するなかで、今、保育園や幼稚園にはどのような保育実践が求められているのでしょうか。そもそもなぜわたしたちの社会には公的保育が必要になったのでしょうか。いつ、だれが、どのように始めたのか？そして今、どの地域で、どんな保育がなされているのか？保育が生成してきた／いる現場を歴史的文化的に把握し、社会構造上の<保育>の位置を確認していきます。被保育体験を相対化し、通俗的な保育・教育言説とは異なる「保育学」「教育学」の視角から子どもたちの今を捉えられるようになることを目的の一つと考えています。</p> <p>また、保育・教育において「あそび」「まなび」「暮らし」「笑い」は実践と理論においてどのように位置づけられてきた／いるのか、保育における「公私の境」という曖昧なラインはどのように構築されてきた・いるのか。こうした家族と保育実践の変遷や今後の課題について考えていくことも目的としています。</p> <p>【内容・方法】</p> <p>保育者には、子どもを肯定的にとらえ、子どもの感じていることを共有し、子どもの意味世界を理解することが求められます。どのような行為にも意味があるとする共感的な保育態度は、啓蒙的あるいは評価的な人間理解とは決定的に異なっているでしょう。家族や社会のあり方について規範的な枠組みをあてはめるのではなく、保育者には、どのような状況にも対応できる柔軟な構え（多様性を受け止める思考）が必要であることを理解します。その上で、子どもたちがこれから創っていく暮らしのために必要な知識や技術を確認し、その暮らしに希望を創り出していく保育実践を具体的にイメージしていきます。</p> <p>子どもの生に敬意を払いつつ、すべての人が排除されない社会の構築をめざす保育実践へ向かうために、基本的には、グループによる①課題研究、②ゼミでの報告、③現場での保育体験、それを重ねながら④卒業研究へ…という流れで考えています。進め方の詳細については、ゼミ生と話し合って決めていく予定です。</p> <p>【授業計画等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年に一度は県外の保育現場に出かけ、具体的な実践から学ぶ機会をもちます（費用の準備をお願いします）。 ・外国の保育実践の映像をみて、それをもとにしたディスカッションを行います（日本の保育実践において「あたりまえ」とされていることの歴史的文化的意味が見えてきます）。 ・各グループが自分たちで決めたテーマに即した研究発表をします（文献検討をするなかで基礎的な知に触れる機会がもてるでしょう）。 			
担当教員からのメッセージ			
<p>まずは、これまでに蓄積されてきた人間の「知」の広がりや深さに触れる機会を（どのような形ででもいいので）もって欲しいと思います。</p> <p>その上で、自分が興味をもったことには丁寧に向かい合っていく時間を確保してください。自分で向かい合うと決めた目の前の課題に手間隙かけて取り組んだという経験が、きっとこれからの人生の糧になります。</p>			
  			